

リレーインタビュー 矢板の未来を紡ぐ

矢板市勤労青少年ホーム
利用者会会長
中沢悦啓さん



町づくりによそ者、若者、ばか者の力が必要と言われますが、そのうちの二つの条件を満たしているのが、前回の坪内智子さんから紹介いただいた中沢悦啓さん。先日行われた「やいたみんなのつどい」でパネリストとして参加。シャープ勤務の独身。東京出身で矢板に来て9年目。技術屋らしく論理的な思考回路が魅力だとか。

■言いたいことを言ってきたら！

もともと小さいころから電子工作が好きで、学生時代はアマチュア無線機を自作したこともありました。そんな経過から家電修理の会社就職したのですが、本社研修でもっと修理しやすい商品にしてくれ！と文句ばかりいってましたら

「君が自分でやりなさい」ということになって、今、AVシステム事業部で働いています。

■カルチャーショックで見方が変わった！

矢板にきた当初、組内にお葬式が出たという理由でまるまる二日間会社を休ん

だ人がいたのに驚きました。何しろ、葬儀は身内や親戚が取り仕切るものと思っていたので、別の世界があるんだと…。

人はどうしても、自分の生まれ育った環境で身につけたものを物差しに物事を判断しがち。そんな私も今は、深い意味のあるこの土地の文化として受け入れています。

この体験は貴重でした。自分の価値観と異なる文化を入れ、新たな物の見方が生まれるためには経験が必要だということ

を身をもつて実感し、自分から地域に出て行くきっかけになったからです。

■矢板にきたから始められたボランティア

ボランティアに興味はあっても、東京にいたころは、会社の往復時間がなかったのですが、矢板に来てやっと実現しました。

子どものころ、ボーイスカウトに入っていて、中一の時に、一人で一泊二日の山登りをさせられたことがあります。普通のテントは持つていくことが許されず、作業に使うブルーシート一枚と必要なもの

だけで、辛かった思い出ですが、反面、いろいろ体験できてものすごく居心地も良かったのです。

矢板にきた当初、組内にお葬式が出たという理由でまるまる二日間会社を休ん

好きになったまちが、住みたくなるまち・・・今あることの中で改善を！

そんな経験を生かせればと、今、矢板レクリエーションクラブというところにボランティアで参加して、子どもたちと関わっています。日本レクリエーション協会が提唱するペタンクやドッジビーなどの決まった遊びだけでなく、ビー玉をボウルに入れてはしでつまんで移動したり、足に万歩計をつけてドタバタしたりと、肩肘を張らずに遊びを工夫したり、子どもたちと一緒に

といった、私自身が子どものころになりたかったような子どもがいますが、そんな子は親に見守られて、いろいろな人と接し、さまざまな体験をたくさんしてき

ます。また、子どもの保育でも、迎える時間ギリギリに駆け込んで嫌な顔をされるのではなく、会社が終わる時間で十分間に合うような時間帯まで預かってくれることが一般的になれば、そういう地域に住みたくなるし、そこが好きになるように思います。

■サラーマンがコミュニティで生きていくためにもっと機動力のあるまちづくりを！

普通のお医者さんでも、歯医者さんでも、営業している時間が短く、会社が終わってから受診できる場所がありません。コストの面で難しいのかもしれないが、せめて七時ごろまでやって欲しいし、それが難しいなら、完全予約制で対応するなど、柔軟性があれば助かります。

市民力というのは、市民の力をまとめて一つのベクトルを作ることだと思うのですが、そのために大事にしなければならぬのは、みんなの意見が交わる場があることだと思います。それが接点であり、その接点さえあれば、そこに情報が生まれ次へとつながっていきますから、まず接点を作ることが市民力のスタートだと思うのです。これは私の経験から生まれた人間観でもあります。



子どもも扱いせず、できるだけ大人と同じ働きかけをするように心掛けています。参加している親子を見てみると、いろいろな親子関係

を垣間見ることができ興味深いのですが、自分が家庭を持って子どもができた時にものすごく参考になりそうです。

中には、好奇心が旺盛で、周囲に気配りができ、友達と仲良くして、めいっばい楽しんで、ルールを守れる

子どもを

市民力というのは、市民の力をまとめて一つのベクトルを作ることだと思うのですが、そのために大事にしなければならぬのは、みんなの意見が交わる場があることだと思います。それが接点であり、その接点さえあれば、そこに情報が生まれ次へとつながっていきますから、まず接点を作ることが市民力のスタートだと思うのです。これは私の経験から生まれた人間観でもあります。